

お墓のすげかえ

長谷川時雨

青空文庫

一族の石塔五十幾基をもった、朝散太夫藤木氏の末裔チンコツきりおじさんは、

三人の兄弟であつたが、揃いもそろつた幕末お旗本ならずものの見本で、仲兄は切腹、上の兄は他から歸つてきたところを、襖のかけから跳り出た父親が手にかけてのだった。末子のチンコツきりおじさんが家督をついだ時分には、もうそんな、放蕩児なぞ気にかけていられない世の忙しさだった。

岡本綺堂氏作の『尾上伊太八』という戯曲の中に、伊太八という幕末の江戸武士が吉原の花魁尾上と心中をしそなつて非人におとされてから、非人小屋の床下を掘る場面があるが、あれを見るたびに私は微笑とも苦笑ともなづけがたいほほえみが突上げてくる。伊太八のは根強い悪だが藤木さんのは時代のユーモアがある。この放蕩漢兄弟は金がほしくなると種々な智恵の絞りっこをしたが、だんだんに詰つて土を売ることを思いついた。

江戸の下町でよい庭をつくるには、山の手の赤土を土屋から入れさせるのである。今のように富限者が、山の手や郊外に土地をもつても、そこを住居にしていなかったもので、蔵と蔵との間へ茶庭をつくり、数寄をこらす風流を楽しんでいた。一木何十両、一石数百両なぞという——無論いまより運搬費にかかりはしたであろうが贅沢を競つた。そ

の地面に苔こけをつけるには下町の焼土では、深山、または幽谷おもむきの風趣ふうしを求めることは出来ない。植木のためにもよくない、そこで赤土の価がよい。

三人の兄弟がその時ばかりは志が一致する。父親が勤めに出てしまうと、なるだけ坪数のある広間、書院の床下から仕事をはじめめる。自分たちでやって見たが、根ねから遊惰ゆうだな男たちには、堅い土がいくらも掘りかえされないのです、大っぴらに父の留守を狙ねらつては払いさげをやる。売る土がなくなると姉が死んだといつて、蔵前の札差ふださしに、来年さらいねんの扶持米を金にして貸せといたぶりに行く。札差し稼業はもとよりそういう放埒ほうらちな、または貧乏な武士さむらいがあつて太るのだ。貴下あなたには泣かされますといいながら絞る。いくらにでも金にすればよいので、時価なぞにかまっていけないよいお得意なのだから、彼らの番頭はうやうやしく町人袴ばかまをはき、手代を供ともにつれて香奠こうでんをもつて悔みにくる。おなじ穴の貉友むしな達が出て殊勝らしく応待して、包んで来た香奠こうでんの包みをもつてはいると、そんな事は知らない姉じや人が、日頃厄介をかける札差の番頭が来たというので挨拶に出て、すっかり巧みたくしりの尻が割れ、ならずものたちは裏門から飛出してしまふ――

そんな話を藤木さんは自分でも面白そうにはなす。尤もつともそれは柳橋にすむようになって、昼も酒盃さかずきをもつていられるようになった、ずっと晩年のことではあるが――

柳橋の角に、檜ひのきづくりの磨きたてた造作の芸妓屋を、姉娘の旦那だんなに建ててもらい、またその隣家となりを買いつづして、小意気な座敷を妹娘の旦那に建増してもらって、急に××家のおとつさんおとつさんとたてられ、ばかに華々はなばなしく彼のキンカン頭が光りだした時、持前の毒舌はいい気になって発揚した。無学で——それは彼もおなじなのだが——平民という、見下みさげられるものとのみこんでいた無智な仲間は、娘を売するような士族でも偉そうにうつかったので彼は得意だった。例によつて彼自身では何一つ楽しみも与えもしないで、苦労ばかりさせた妻にむかつては「ぼていふりの嬢かかあが相当だ」と罵ののった。朝湯にはいって、講釈の寄席よせへ昼寝をしにゆくのを毎日の仕事にしていたが、あんまり口やかましいので、佃つくだじま島しまの庭の梅が咲いたからお訪ねなさい、桜がよいでしょうから行ってらっしゃいと、私の父の閑居ていに体よく追払われては来た。生ていたころの木魚もくぎよのおじいさんと三人、のどかな海に対して暮を打ち暮した。島には木橋あいおいばしの相生橋あひおいばしが懸かっていたばかりで、橋の上を通る人は寥々りようりようとしていた。本ほん佃つくだの住吉の渡船わたしでくるか、永代橋のきわから出て、父の閑居の門前につく渡船に乗るかが多かった。

この渡船は、助さんという前の小屋にいた若い船頭さんのために、父がすこしばかり金で手伝つてやつてはじめさせた渡しだった。人通りのない父の家の門の柳が、わたし場の

目じるしだった。さて、その三人の幕末の残り者が縁近くに碁盤を据えると、汐潮^{しお}があげてきて、鼻のさきをいせいのいい押送りの、八丁櫓^ろの白帆が通ろうと、相生橋にお盆のよな月がのぼろうと、お互が厭^{いや}がらせをいいながら無中になっている。父は、島人から村長さんと名づけられているほどのんきで飄^{ひょう}逸^{いつ}な、長い白い髭^{ひげ}をしごいている。木魚の顔のおじいさんはムンツリと、そのくせゲラゲラと声をださないで崩れた顔を示す。つまみよせたような眼の、キンカン頭の藤木さんは、俳諧^{はいかい}でもやりそうな渋^{しぶ}仕立^{じだて}の道行き姿になつて、宗匠^{そうしやう}頭巾^{ずきん}のような帽子を頭にのせている。そして懷中時計を三十分に一度はきつと出して、ただ眺める。竜頭^{りゆうず}をいじつて耳へもつてゆくしぐさを繰返す――

この碁打ちたち、かたちはさも巧者でありそうだが、だが、ある折、妹の婿の若い、海軍のヘツポコ少尉がこの三人の前で、

「とても駄目です、僕は軍艦^{かんかん}でも、ものにならない方の、その中の一番しまいです。」

「まあ、やって見な、おれが対手^{あいて}になつてやろう。」

父が少尉との最初の盤にむきあつてすぐ負けた。若い軍人は言った。

「お父さん負けてくだすつたんです、そんなはずはありません。」

「そりやそうだろうとも、さあお出なさい、こんどは僕だ。」

藤木宗匠が向った。父は変な顔をして黙っていた。勿論チンコツきり宗匠もすぐ負けた。「妙だね、こりやおつだよ、以心伝心、若いものに華をもたせようとするのかな。湯川氏はそうはいかないぜ。」

「いや、拙者はどうも。」

木魚のおじいさんは目をクシャクシャとしばたいて、驀のようにゆったりしている。だが、結局はやっぱり負けた。若い少尉はころがつて笑った。

「僕より拙いものがあるなんて——これじゃ碁じゃない……」

「碁じゃないって？ 碁じゃない、碁じゃない、こちやゴジャゴジャだ。」

藤木さんも黄色い長い歯を出して笑った。

しかし、そうしたのんきな生活——芸妓屋おとっさんの成功も、藤木さんみずから努力した運ではなかった。彼の生涯に恵まれた幸福は、服従心の強い、優しい妻と娘をもった事だった。木魚の顔のおじいさんの老妻がいしくもいったことがある。

「親不孝者が、親孝行の子をもつなんて、誠に不思議さね。」

清元と踊りで売っていた姉娘お麻に地味な客がついた。丁度年期があいたあとだったので、彼女は地味にひいてしまった。その頃の九段坂上は現今よりグツと野暮な山の手だ

つた——富士見町の花柳界が盛りになったのは、回向院のおおずもうの境内へかかつてから、メキメキと格が上つたのだ。従つて町の雰囲氣も違つて来た

——お麻さんが選んだ妾宅は、朝々年寄つた小役員でも出てゆきそうな家だつた。母親は台所のためによばれていつたので藤木さんの不届は一方ならずであつた。

お麻さんがその妾宅で、鬢髻をひつつめた山の手風の大丸髻にいつて、短かく着物をきていたのも暫らくで、また柳橋へかえつた。こんどは提灯かりの通勤だつたので、おなじ芸妓屋町に住居をもつた。

地味な氣性でも若い芸妓である、雛妓のうちから顔馴染の多い土地に住居をもつたから、訪ねてくるものもある。見得の張りたいところを裏長屋で辛棒しているのだから、察してやらなければならぬのを、チンコツきりに厭きはてた父親は、一緒に住まわせなければ、晩にいつてその家の棟で首をくくつてやるというやがらせた。事実そうもしかねないほど思い入っているのです、世帯を一つにしたが——娘の心は悲しかったであつたらう。芸で売つた柳橋だとはいえ、一時に負担が重すぎた。私は従姉をたずねていつて、暗澹たる有様に胸をうたれて途方にくれたことがある。これが、あのはなやかに、あでやかに見える、左褌をとる女の背に負う影かと——

平右衛門町の露路裏だった。柳橋の裏河岸に、大代地に、大川の水にゆらぐ紅燈は、幾多の遊人の魂をゆるがすに、この露路裏の黒暗は、彼女の疲労のように重く暗くおどんでいる。一番奥の、人力車夫の長家のような、板戸の家が彼女の巣だった。

更けてはいなかったが戸を叩くと、床の低い四角い家の上りがまちに藤木さんが寐ていて黒つぽくモゾモゾした。奥の壁の隅に島田鬘が小さく後向きに寐ている。にぶい燈火にも根に結んだ銀丈長が光っていた。壁にはいろいろなものがさげてあつたが、芸妓の住居らしい華やかなものは一品もなかった。

「あの娘は瘡のせいかな寐出すと一日でも二日でも死んだもののように眠っていて——」
母親は祝いにきてくれたのにと気の毒そうに呟いた。

心の重荷——そんなものが感じられて従姉の苦悩に私は胸をひきしめられていた。この裏家から高棲をとって、切火をかけられて出てゆく芸妓姿はうけとれなかったが、毎日細二子位な木綿ものを着て、以前の抱えられた芸妓屋へゆき、着物をきかえて洗湯にも髪結いさんにもゆくのだと母親が説明した。

とはいえ、そうしたはかない裏は知らず、料亭の二階へよぶ客は、芸妓と見れば自分から陽気になってくれる。彼女にもよい客が出来かけた。今日は何家の裏二階で、昨日はど

この離れでと招ぶ客の名が知れると、妙なことにチンコツきりおじさんが納まらなくなつた。前に囲つてくれた旦那と二人して妨害運動をしたりしたが、律気な——鉢植えの櫛みたいな生れつきの妓にも芽が出て、だんだんに繁昌して来た。一人だちになり、勝気な負ずぎらいな妹もおなじ水にはいつて、どうやら抱妓もおけるようになった時、東京中の盛り場で「旦那」とよぶのはあの人だけだといわれた遊び手の、若い大商人と縁を結んだ。

小山内薫氏の書いた小説『大川端』や『落葉』に出てくる木場の旦那、および多さんがこの二人である。多さんとは藤木麻女のことである。

私はついにそこまで達した彼女の子供の時から苦勞をあんまり知りすぎている。だまつて苦惱をになつてゆく。痩せた、小柄な、あまりパツとしない彼女の芸妓姿を、いたわり撫でたい気持ちで遠くながめていた。アンポンタンは成長するにしたがい家内のなかの異端者としてみられていたから、どうする事も出来ないで、抱えの時分、流山みりん瓶入の贈物をもつてくる彼女の背中を目で撫でいたが、彼女におとずれた幸福は、彼女にはあんまりけげばしい色彩なので、信実はやっぱ苦勞が絶ないであろうと痛々しかった。なぜなら、らんまんたる桜の咲きさかる春のような、または篠つく豪雨のカラリ

と晴れた、夏のような風情ふぜいは彼女にはそぐわなかった。もつと地味で、堅実な愛が、彼女を待たなければ真の幸福とはいえないように思えた。私が彼女にあらうことはより遠々しくなつた。

放蕩児ほうとうじが金を散じる時の所作しよさはまず大同小異である、幫間たいこまちにきせる羽織が一枚か百枚の差である。芸妓のとりまきが一流と二流の相違は、料亭待合ちややまちあいの格式、遊ぶ土地、すべての附合の範囲と広さにおよぼしている。中村鴈治郎なかむらがんじろうが東都の人氣を掴得かくとくしようとするいじようと歌舞伎座から「まだ旦那のお招きをうけないが——」と頼みこんでくる。摂津せつづ大掾いじようが来た、何が来たと東京の盛り場の人たちが大阪でうけるお礼のかえしを、一手に引受けるほど遊びに顔を売った旦那を彼女は旦那にしたのだった。しかも彼女は律氣真面目まじ目一方で彼をまもつた。

彼女は浜町に住んだ。藤木さん夫婦は妹娘しんを真まにして柳橋でパリパリの××家のおとつさんおつかさんになつてしまった。手拭てぬぐいゆかたの立膝たてひざで昔話をして、小山内さんや猿之助を煙にまいていた。浜町の家には、近くの中洲なかずの真砂座まさござにたむろしていた、伊井、河合、村田、福島、木村などの新派俳優の下廻りが、どっちが楽屋かわからないほど入込んでいた。藤井六輔ろくすけとか小堀誠などは自分の家のようにまめに働いていた。芸妓、各遊芸

の家元たち、はなしか、たいこもち 幫間、集ればワツワツいう騒ぎだった。お麻さんはいつもそれらの後始末ばかりしていたが、彼女はいっちゅうぶし 一中節の都の家元から一稲の名をもらっていたので、その名びろめを旦那が思いたった時は——彼女に対する日頃の謝意というより自分の道楽の方が勝ったであろうが、二日に渡った盛大な催しを柳橋の亀清楼かめせいで催した。仕着せ、まきもの、配りもの、飾りもの、ありきたりな凝こりようではなかった。芦あしに都鳥みやこどりを描いた提灯ちようちんは、さしにも広い亀清楼の楼上楼下にかけつらねられて、その灯入りの美しさ——岸やねぶねにつないだ家根船にまでおなじ飾りが水にゆれて流れた。

浜町の岡田では、この旦那のために舞台をつくって、あの広い家中を、一間一間樂屋にして素人芝居が開催される。もとより番附その他の設備、樂屋の積物、いうまでもなく人氣役者の名題披露の通りにした。とうとう新富座まで借り入れてやったこともある。

お麻さんと旦那の生活はこの位にしておこう。お麻さん夫婦の浜町の家に特記してよいのは、小山内氏のために潮文閣おこを挙おこして第一期『新思潮』を出したことである。そのころとしては作家たちを花屋敷とぎわの常磐とぎわという一流料亭に招待したり、一足飛びに稿料何円かを支払って一般の稿料価上げを促したものである。

姉娘と妹娘との旦那の張合いで、××家は柳橋でもパリパリの芸妓家となった。妹娘の

旦那、銀行の頭取りは、事ごとに木場の旦那とは違ったゆきかたで、自分の女にした妹娘の家作に手入れをする、動産、不動産、いずれも消てしまわないものを注ぎ込んだ。その時分の藤木さんの家こそ不思議だ。敷居一つまたぐと次の間は妹の家作で、入口の方の家が姉娘の家作、どっちの道、角家の磨きあげた二階家つづきで、お麻さんの芸妓名をついだ妹が主で、大勢の抱妓がいた。妹は築地のサンマー夫人のところへ会話を習いにいったりして、二階の一間には床の間に花あり、衣桁あり、飾り棚があり、塗机があり、書道の手本と硯が並べてあるという豪奢な貴婦人好みであった。

産むなら女の子をうんでおけと——むべなるかなで、チンコツきりおじさんはその家のお父さんとして死んだので、実は大層もない葬式の列が編上げられて、死に果報なこととなつたが、同時にこそばゆい華やかさでもあつた。

最もその時分、角力の親方だとか顔役だとか、人気役者とかいえば、そうした突拍子もないお祭りさわぎの葬式もあつたが、チンコツきりおじさんを知っているものには不思議な微笑をもつて送られた。小禽が何百羽はいつていようかと思われるほどの大鳥籠、万燈のような飾りもの、金、銀、紅、白の蓮の造花、生花はあらゆる種々な格好になつてくる。竜燈、旗、天蓋、笙、筆、筆、女たちは白無垢、男は編笠をかぶつて——清楚な

寝棺は一代の麗人か聖人の遺骸^{いがい}をおさめたように、みずみずしい白絹におおわれ、白蓮の花が四方の角を飾って、青い簾^{すだれ}が白房で半ば捲^{まきあ}上げられ、それを幾町が間か肩にかつぎあげずに静々と柳橋から蔵前通りへと練り歩かれた。

それをまた迎える本堂は花を降らし、衆僧は棺をめぐって和讃^{わさん}の合唱と香の煙りとで人を窒息させた。しかもまた堂にみつる会衆は、片時もだまっていられないたちの種類なので、後側の方は、おとむらいなのかお浚^{さら}いなのか、ともかく寄合には相違ないが忍び笑いまでする――

私は死んでも、決して自分ひとり所有の、立派なお墓なんていうものを建るものではないと、その時思った。前にもいったが、藤木家一族の墓石は幾十基かならんでいるが、その中に、特によい位置をしめて、四角四面、見上げるほど高く、紋をつけた家根まで一ツ石でとつてある、石の質も他のとは違うゆいしよありげな一基は、ずっと前の徳川将軍に昵懇^{じっこん}していた女性の墓だということだった。それがまあ、なんと光栄なお見出しに預かつたことか、肝心な墓の主に断わりもなく――尤も断^{もつと}わろうにも百万億土にゆかなければならないが――墓主が代つたことである。これがいい、これがいい、そんな風にかんたん

にとりかわってしまった。そして、かつてはどんな美女で、將軍の意志、即ち時の天下の意志を動かしたかも知れない女の墓名は、チンコツきりおじさんの名に代ってしまった。尤も、何々院殿という偉そうな名にはなつたが――

しかし、もとの墓主だって、私は美女ときめているが、どんな人だったのか、それはわかりはしない。墓石が立派だから、下の人まで立派だといわれない。むしろ藤木さんなどは愛すべき俗人だ。彼は言ってるだろう。

「なんというべらぼうなこつたか、干からびた鼠ねずみのような俺おれが――ここにはいるんだって？　わしや、はずかしいわいなあ。」

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お墓のすげかえ

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>